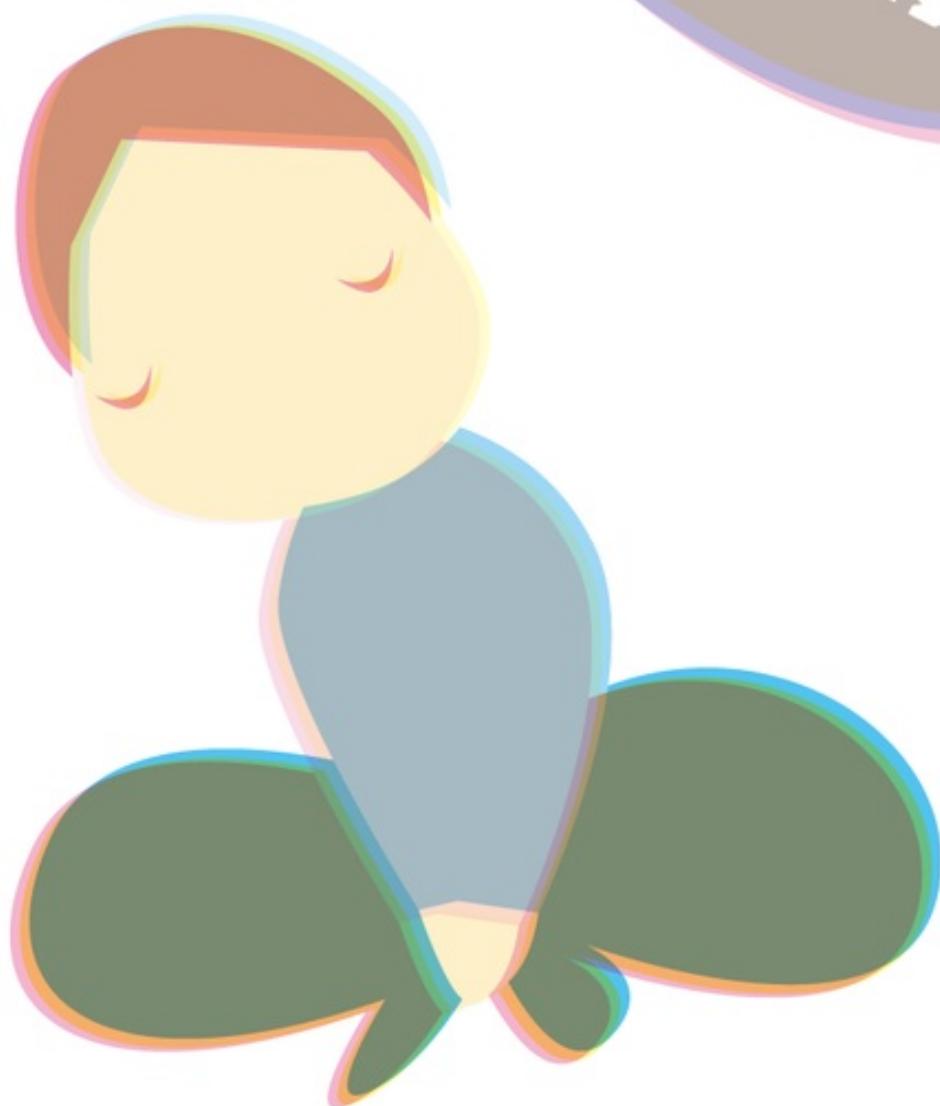


つとむくん

その後



ハーモニカのつとむさん

川田つとむは、誕生日を迎え、七四歳になった。アルバイトをやめて二年以上が経つ。毎日の散歩の効果か、すこぶる元気で晩酌も進む。

五月のある日、自治会館の案内板で「ハーモニカ教室生徒募集」のポスターをみつけた。恐る恐る電話すると、全くの初心者でも構わないという。思い切って申し込んだ。しかし、心配なことがあった。つとむの『音痴』は筋金入りなのだ。

会社勤めの頃、社員のバス旅行では、つとむが最初に歌うことが暗黙の了解になっていた。まず苦行を終えてから、楽しもうということだった。つとむの歌が終わると、身を縮めていた全員が、ほっと安堵のため息を漏らし、それからやっと、旅行気分が車内にあふれたのだ。

宴会では、つとむがカラオケのマイクをにぎると、何故か機械がよく故障した。幹事が「おかしいなあ。さっきまでどうもなかったのに」

などと言いながら、あちこち触ったけれどどうも原因が分からない。しかし、次の人がマイクを持つと不思議と直ったのだ。つとむが歌いだすと、トイレがいっぱいになった。誰もがこぞって逃げ込むのだ。歌い終わった頃に、宴席は元のようになった。

そのつとむがハーモニカ！

(音痴の元凶のこの耳で大丈夫だろうか)

そう不安がよぎる。

六月から通いだした。月二回で、月謝は二百円、それも会館使用料込みというから驚きだ。しかも遠くから通っておられる先生までが同額の支払いと知り、なお驚いた。つとむは世話人の方にご厄介をかけ、新しいハーモニカを購入し、譜面受けまで用意した。一人前の演奏家ではないか。ちょっとワクワクした。

「おうまのおやこ」「ちょうちよ」で始まった曲も八月の今日、五回目で、十四曲の楽譜を渡された。家で練習するしかない。エアコン苦手のつとむは、窓を開けてブーハーブーハー、近所迷惑だろうと申し訳なく思う。妻の智恵はひたすら耐えている。

九月には「敬老の集い」で演奏するとか。もちろん上手な方が出演され、つとむは客席だ。それを聞いて、智恵は胸をなでおろした。高齢の方が体調を崩されたら大変だ。「敬老の集い」は、祝う人も祝われる人もほとんど年齢差のないのはご愛敬だ。

(あー、また練習が始まった)

童謡から歌謡曲に進歩して、聞こえてくるのは「いつでも夢を」だ。智恵は耐える。でも、ブーという音がするやいなや、ダラーっと寝そべっていた三匹の猫たちが、一目散に逃げ出す。彼らも危機管理ができているのだ。

つとむは、それでも真剣に吹き続けている。

カスタネット以来、自分のための楽器を手にするうれしさがあふれる。何十年も演奏されているサークルの仲間の足をおもいつきり引っ張りながらも、続けていきたいと思うつとむだった。